

# 一級河川相模川上流域における 水位周知河川の指定について

山梨県県土整備部 治水課 藤本 雅樹



## 1. はじめに

山梨県は、甲府盆地を除けば、平野部は極めて少なく、総面積の約78%が山間部です。

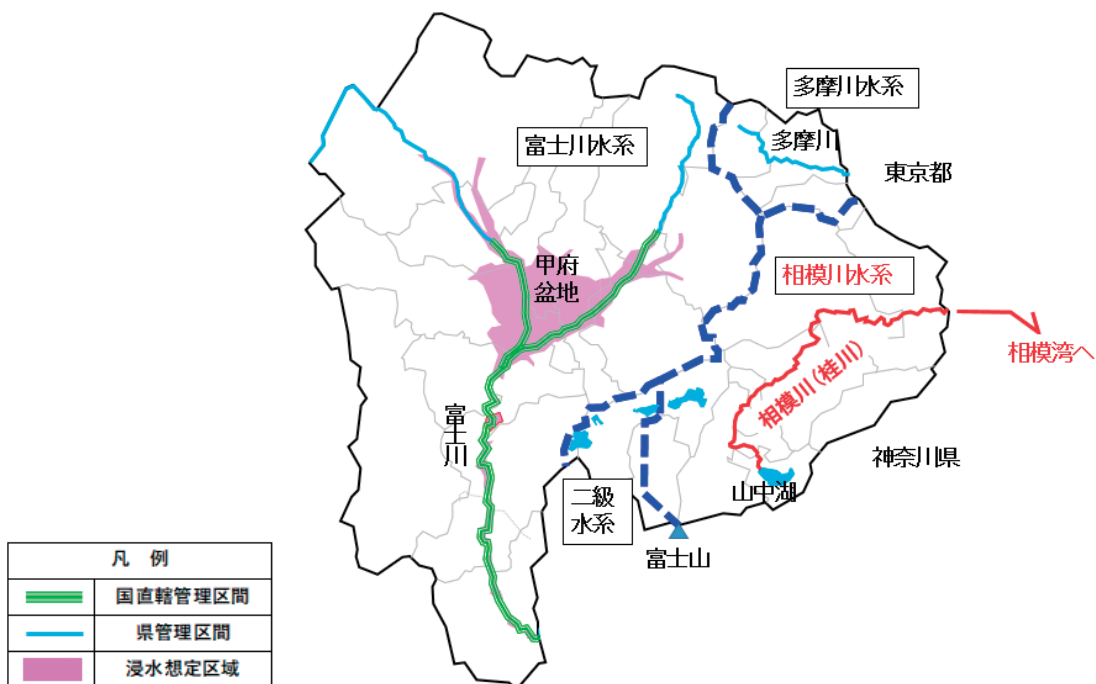
また本県の河川は、秩父山系と、南アルプス山系の山岳地帯から発し、甲府盆地の南端で合流、南下して駿河湾に注ぐ富士川水系と、富士山麓の山中湖を源とする桂川（相模川）に、南都留郡の各河川が集まり東流して神奈川県にはいる相模川水系および、大菩薩嶺から発生し東流して東京都にはいる多摩川水系の3つの水系から成っております。

これら河川における洪水予報河川、および水位周知河川への指定は、平成29年度に富士川水系の直轄管理区間が指定されたのを始まりに、これまで平野部である甲府盆地内の河川において実施してきましたが、このたび比較的山間地を流下する相模川水系においても水位周知河川の指定するため検討を行っています。

## 2. 相模川（桂川）流域および河川の概要

相模川（桂川）は、その源を富士山に発し、山中湖から笹子川、葛野川などの支川を合わせて、山梨県東部を東に流れて神奈川県に入り、相模ダム、城山ダムを経て流路を南に転じ、神奈川県中央部を流下し、中津川などの支川を合わせて相模湾に注ぎ、その流域は山梨、神奈川の二県にまたがっている、流域面積1,680km<sup>2</sup>（うち本県分988km<sup>2</sup>）幹川流路延長109kmの一級河川です。なお、相模川の神奈川県境より上流を、山梨県では桂川と呼んでいます。

圏域内の河川はその大半が渓谷を流下する自然河川で、河道の形状も複雑で、瀬や淵が幾つも存在して、魚類等の生息場として良好な環境を形成しており、溪流釣りの場として大いに利用されています。また、上流部では国指定の史跡名勝天然記念物である富士山及び河口湖、山中湖の周辺は、富士箱根伊豆国立公園に属していて、多くの観光客が訪れる地域です。



図－1 山梨県の水系と浸水想定区域



写真-1 富士吉田市内



写真-3 大月市内



写真-2 都留市内 (田原の滝)



写真-4 上野原市内

### 3. 対象外力の設定

本検討で対象とする桂川の水位周知区間は上流の山中湖から下流の神奈川県境までの約60kmと長く、上下流では流況のスケールが全く異なります。

桂川水系の河川整備計画においても、大月市の笹子川合流点を境に、東部圏域（下流側）、富士北麓

圏域（上流側）でそれぞれ河川整備計画が策定されており、桂川本川の高水計画もそれぞれ別に策定されています。

よって、本検討でも下流の神奈川県境～笹子川合流点と、上流の笹子川合流点～山中湖の2区間に分けて検討を実施しました。

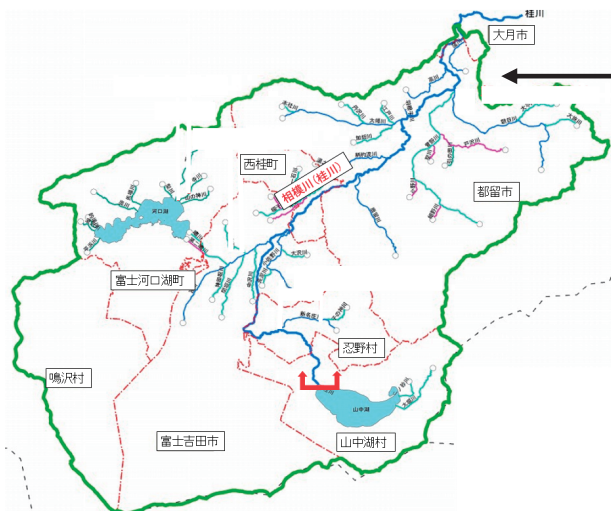


図-2 相模川上流（富士北麓）圏域

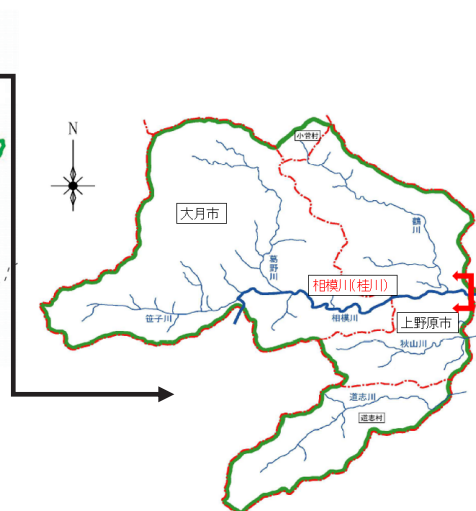


図-3 相模川上流（東部）圏域

#### 4. 流出モデル検討

上流の富士北麓圏域河川整備計画においては、下流の東部圏域河川整備計画の受け入れ可能流下量を考慮して、富士北麓地域一帯310.6km<sup>2</sup>を富士山噴火に由来するスコリア地域の浸透域として飽和雨量(Rsa)を無限大として流出量を算定しています。

そこで今回の洪水浸水想定区域の検討においても、河川整備計画に基づき浸透域をRsa=無限大とし、浸水被害が発生した平成23年の台風15号の出水の実績降雨を与えて試算したところ、浸水範囲が過小に再現される結果となりました。

このため、想定最大規模の降雨が発生した時でも、浸透域のRsaを無限として扱う事の妥当性を検討し、Rsaの設定値は、河川整備計画の将来計画規模

(1/80)の降雨量を踏まえて、466.2mmとして設定するものとししました。

#### 5. おわりに

今回の流域での洪水浸水想定区域の検討では、対象河川の上下流で別の河川整備計画を作成している事や、整備計画上、一部流域において飽和雨量が無限大に設定されている事により浸水域が満足に表現出来ない等、事例に乏しい問題の解決に苦勞しましたが、これまで洪水浸水想定区域が指定されていなかった地域の住民の皆様が、浸水の恐れがある際に迅速・確実に避難行動が取れるよう、妥当な水害リスク情報を示してまいります。